

私は家庭に在つては、いつも冗談を言っている。それこそ「心には悩みわずらう」事の多いゆえに、「おもてには快樂」をよそわざるを得ない、とても言おうか。いや、家庭に在る時ばかりでなく、私は人に接する時でも、心がどんなにつらくても、からだがどんなに苦しくても、ほとんど必死で、楽しい雰囲気を作る事に努力する。そうして、客とわかれた後、私は疲労によるめき、お金の事、道徳の事、自殺の事を考える。いや、それは人に接する場合だけではない。小説を書く時も、それと同じである。私は、悲しい時に、かえつて軽い楽しい物語の創造に努力する。自分では、もつとも、おいしい奉仕のつもりでいるのだが、人はそれに気づかず、太宰という作家も、このごろは軽薄である、面白さだけで読者を釣る、すこぶる安易、と私をさげすむ。

人間が、人間に奉仕するというのは、悪い事であろうか。もつたいぶつて、なかなか笑わぬというのは、善い事であろうか。

つまり、私は、眞面目で興覚めな、気まずい事に堪え切れないのだ。私は、私の家庭に於いても、絶えず冗談を言い、薄氷を踏む思いで冗談を言い、一部の読者、批評家の想像を裏切り、私の部屋の畳は新しく、机上は整頓せられ、夫婦はいたわり、尊敬し合い、夫は妻を打った事など無いのは勿論、出て行け、出て行きます、などの乱暴な口争いした事さえ一度も無かつたし、父も母も負けずに子供を可愛がり、子供たちも父母に陽気によくなつく。

しかし、それは外見。母が胸をあけると、涙の谷、父の寝汗も、いよいよひどく、夫婦は互いに相手の苦痛を知っているのだが、それに、さわらないように努めて、父が冗談を言えば、母も笑う。

しかし、その時、涙の谷、と母に言われて父は黙し、何か冗談を言つて切りかえそうと思つても、とつさにうまい言葉が浮ばず、黙しつづけると、いよいよ気まずさが積り、さすがの「通人」の父も、とうとう、まじめな顔になつてしまつて、

「誰か、ひとを雇いなさい。どうしたつて、そうしななければ、いけない」

と、母の機嫌を損じないように、おつかなびつくり、ひとりごとのようにして呟く。